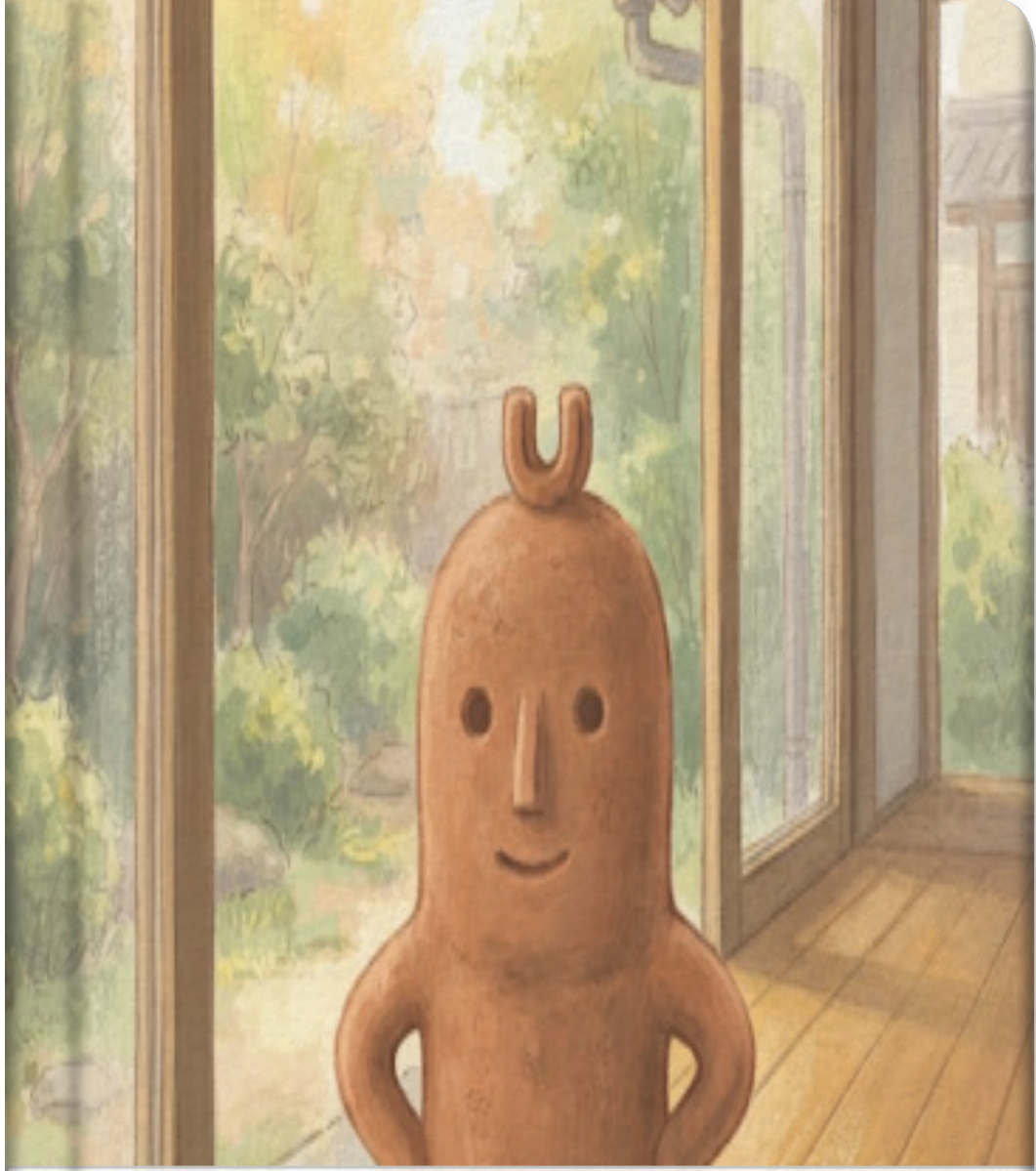

はにぞうの、こころの整理

グレイス著



日当たりのよい縁側の奥の方に、
茶褐色の小さなお友達がぽつんと
立っています。名前は「はに
ぞう」。75歳のおばあちゃんが、
土をこねて一生懸命作った
「はにわ」です。はにぞうは、
こちらに気づいて、ゆっくりと
動き出しました。



ちょこ、ちょこ、ちょこ。はにぞうが短い足で、ユーモラスに左右に揺れながら歩いていきます。



「それは『終活』のこと。身の
回りのものを片付けたり、
これからのことを決めたり……。
正直、めんどくさいし、
しんどいですよね」はにぞうは、
棚に並んだたくさんの湯飲みを
先にして、ふうっとため息を
つきました。



「でもね、こうして腰に手を
当てて考えてみると、生きて
自分のためだけじゃないんだって
思うんです。終わられる家族が
正義でないように、そして、
何より自分の心をもっと軽くする
ために」



また少し、はにぞうがこちらに
アプローチしてきました。



「全部大丈夫大丈夫ですよ。
今日はこの引き出し一つだけ。
明日はあの箱の中だけ。はにわの
歩みみたいに、ちょこちょこ、
ゆっくりでいいんです」



「伝えたい言葉を書いておくのもいいですね。『ありがとう』や『大好きだよ』。そんな言葉が並んでいるだけで、家族はきっと救われるはずです」



「整理が進むと、不思議と家の
中に新しい風が吹くような気が
しませんか？ 重荷を少しずつ
おろして、今の時間を心ゆくまで
楽しんでください。それが本当の
終活なのかもしれません」



「さあ、今日も一日を大切に。
あなたの心、いつも
晴れやかでありますように」はに
ぞう、小さな口をきゅっと
上げて、ニッコリと微笑
みました。そして、権利を少し
挙げて言いました。